

冬どりタマネギに関する研究

第1報 冬季休眠因子の存在について

小川 勉・松原 徳行

(長崎県総合農林試験場)

OGAWA, T. and MATSUBARA, N.
Studies on the Winter Harvest Onions
(1) Being of the Winter Dormant Genes

冬どりタマネギに関する研究が各地で行なわれているが、まだ完全な品種が育成されていない。長崎においては、1957年よりタマネギの F₁ 組合せ検定を行なってきたなかから、1961年貝塚極早生×Soutnport Red Globe の F₂ のなかから、苗床で(11月)結球、休眠した個体を3個発見したので適否を検討した。

この冬季休眠個体を8年間養成し、1970年このなかの1個体から採種した F₃ 個体を供試した。

試験方法

セットの養成: 1973年3月1日苗床には種、5月16日～6月6日にセットを収穫しつり玉貯蔵した。9月3日本ほにセットを定植し、結球生態を調査した。栽培管理は慣行に準じて行なった。

試験成績および考察

セットの倒伏期は第1表のように5月16日から20日間にわたって倒伏し F₃ 世代の分離の大きさを示した。しかし、5日毎の収穫数はほぼ一様であった。セットの大きさは、早生ほど小さく2～3g、中生で4～6g、最もおそいE群は7～10gに達した。

本ほにおける自然倒伏期は、第2表に示すように、セットの収穫(倒伏)期が早かったA、B群が早く結球し、11月21日には30～40%が倒伏した。最も晩生のE群は11月30日より始まり、1月14日に全株倒伏し、すべて冬季休眠する特異形質を立証した。

1球の平均球重は、セットの小さいA、B群は全般に小さく、とくに早く倒伏したものほど小さかった。最も大きい正常な球を形成したのはC、D群の11月30日～12

第2表 本ほ(秋作)における倒伏期

セットの 早 晩	倒 伏 期 別 球 数 (個)					合 計 (個)
	11.21	11.30	12.10	12.20	1.14	
A 極早	4	4	2	1		11
B 早	4	4	3	2		13
C 中	3	5	5	1	2(分)	16(2)
D 晩	2	6	4	3(分)		15(3)
E 極晩		2	4	6(分)	4(分)	16(10)

注) 1区16個体、不足数は欠株、(分)は分球

第3表 本ほにおける1球平均重

セットの		倒 伏 期 別 1 球 重 (g)					平均 (g)
早晩	球重	11.21	11.30	12.10	12.20	1.14	
A	2～3 g	33	52	65	24		44.9
B	2～4	48	73	92	74		69.5
C	4～6	77	105	132	70	84	103.3
D	5～8	80	111	133	105		111.3
E	7～10		95	106	103	85	98.4

月10日の間に倒伏した中生種で、100～130gであった。晩生のE群はかえて小さく、100g内外に止まった。

分球は、セットの大きい群に多く、最も大きいE群では60%が分球し、D群でも20%が分球しており、5～6gのセットが安心と思われる。

第1表 セットの倒伏期別球数, 球重

收穫期 球 色	A	B	C	D	E	合 計	球色別比率 %
	5・16	5・21	5・26	6・1	6・6		
黄色	16 個	10 個	12 個	8 個	7 個	53 個	23 %
淡黄紫色	6	6	7	4	2	25	11
淡紫色	7	12	8	10	4	41	18
紫色	17	17	13	11	18	76	33
濃紫色		6	9	4	15	34	15
合 計	46	51	49	37	46	229	
比率(%) 球重(g)	20 2～3	22 2～4	21 4～6	16 5～8	20 7～10		